
明るい未来へ

ポタじい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明るい未来へ

【Zコード】

Z92360

【作者名】

ポタじい

【あらすじ】

何処にでも居る「ぐぐく」平凡な高校2年生の大野おおの 盛じょうは、代わり映えの無い繰り返しの日常を退屈だと思っていた。

いつも通り下校途中の電車に乗つてみると睡魔に襲われ寝てしまう。気が付くと車内の様子が変わっていて同世代の少女、香川ありさと出逢いそしてリリスに助けを求められエヴァの世界に入り込む。

彼は、暗く悲しい結末を迎えるヒーラーの世界を、そして碇シンジをどう救うのか？

彼の非日常が始まる……。

プロローグ ～非日常の始まり～

毎日変わらない日常。繰り返しの日々……。昨日と同じ今日、今日と同じであるひつ明日。こんな日常はつまらないと思っていた。

そう、あんな夢のような体験をするまでは。

俺は、大野 盛。高校2年の17歳だ。毎日、電車で通学している。今は学校が終わって電車で帰ってる途中だ。

「ふあー、眠いなあ」

一眠りするとするか。俺は携帯ねアラームをセットし眠りについた。

ふと目が覚めた。

……おかしい。ここ何処だ？

見渡すと、確かに俺は電車に乗っているのだが、車内の様子が明らかに違う。乗っていた筈の帰宅中のサラリーマンやオレ、学生達の姿が消えている。おまけに床や壁は木製になっており、かなり旧式の電車みたいになっている。モーターの音も古めかしい。車窓の風景も見たことがなく、ただただ夕日をバックに建物や架線柱が流れて行くだけだ。

とりあえず、車内を探索してみることにした。隣の車両に行つてみると一人の少女が居た。

彼女も何故自分がこの電車に乗っているのか分から無い様子だ。

彼女は俺に気が付くと駆け寄ってきた。

「あの、ここは何処ですか？この電車は何処に向かってるんですか？」

「「ゴメン、俺も分からんんです。ところであなたは？あ、俺、大野 盛つていいます」

「わたしは、香川ありさつていいます」

香川さんはショートヘアで俺より少し頭半分くらい背が低かった。

彼女と何故こんな状態になつたのかを話していると向處からか声が聞こえた。

『漸くそろつたわね』

「「えつ！？」

辺りを見渡すと、いつの間にかもう一人少女がいた。
俺は、この少女を知っていた。水色の髪に透き通るような白い肌。
そして紅い瞳。

間違いない、俺のよく知っているアニメのキャラ。エヴァの綾波レイだ。

「……あ、綾波レイ……。」

「それって、あのロボットアニメの…？」

俺は、いつの間にか口に出してしまついた。
俺の咳きに香川さんが反応する。

「いいえ、私はリリス。あなた達に頼みたい事があつてここに呼んだの」

「……夢じゃないよな？」

「ええ、夢ではないわ。あなた達には、向いつの世界と碇君を助け

て欲しくて呼んだの。手を出して「

俺達はリリスに言われるまま手を出した。ちゃんと握っている感覚はある。どうやら夢ではないらしい。

リリスの手を握ると頭の中に映像のようなものが流れ込んできた。

父親に突然呼び出され、エヴァに乗ることを強要され、使徒を倒す。一時期は楽しい日々を過ごすが、使徒との戦いは激化していく、自分を好きと行ってくれた友人を握り潰す……。それでも戦いは終わらず、最後には何も無いただただ、紅い世界が待っていた。簡単に言うとエヴァのダイジェストみたいなものだった。しかしあまりにもリアルで隣に居る香川さんは泣いてしまっていた。

やがて俺達の乗った電車はホームに滑り込み扉を開いた。

「お願い、碇君を救って」

ここまで言われたらやるつきやない。それに何だかワクワクしてきた。

「リリスの頼みは分かった。やつてやるよ!..」

「でも、どうしたらいいの?」

香川さんが不安そうに聞く。

「出来るだけのサポートはするわ。だからお願い

「わかった。香川さん、それじゃあ、行こうか?」

「うん、わたし達にどれだけのことが出来るか分からぬいけど、きっとシンジ君を助けてみせる。だから安心してください、リリスさん」

俺は香川さんの手をとり電車を降りた。降りた瞬間、目の前が真っ白になり意識が飛んだ。

プロローグ ～非日常の始まり～（後書き）

はじめまして、ポタじいと申します。

初めての執筆です。完結まで時間が掛かるかもしれません、が、完結出来るように頑張りますので宜しくお願いします。

第壱話 第3新東京市へ

気がつくと駅前の広場に居た。

「ここはどこの？」

隣で香川さんが咳く。

「どうやら、エヴァの世界に居るみたいね」

「えつー？」

な、なんだ？声がおかしいぞ？まるで女の子みたいだ。それに口調も……。

香川さんが俺の方をまじまじと見てる。ん？顔に何かついてる？

「あのお……大野君よね？」

不安そうに間違つてたらどうしようと言つた感じで俺に聞いていた。

「ええ、そうよ？どうかした？」

ん！？ 口調がおかしい。やはり声も変だ。

「どう見ても女の子にしか見えないんですけど……」

「ふえ！？」

慌てて自分の身体を触つて確認する。
眼下には豊かな曲線を描いた丘が二つ……。

「む、胸え！？」

……と言つことせ、もしや……。

手を股関節の方に下げていく。

な、無い！？！ アレが無い！？！？

「わたし女の子になつてるつー？」

な、何故性転換しちまつたんだ！？

『一つ言つのを忘れてたわ。この世界でのあなたたちの身体を構成するとき、ダミープラントにある私の身体を使ったの。だから彼の場合、女体化してしまったの。女体化にあたって不便や不都合がないように記憶を修正してるから、この世界での生活に不都合はないはずよ。だから安心していいわ』

「それ以前に身体が女になつた時点で不都合なんだけ?」

『しばらく我慢して。もうすぐ碇君が来るから彼の事お願いね。あと、あなた達は一卵性双生児の姉妹と言つ事になつてるから』

それつきりリリスの声は聞こえなくなつてしまつた。

「お願ひつてこんな身体でどうじりつて言つのよお……」

『本日、12時30分東海地方を中心とした中部、関東全域に特別非常事態宣言が発令されました。住民の皆様は直ちに指定のシェルターに避難してください。繰り返しあ伝え……』

「ねえ、大野…君。シェルターに避難しなくて大丈夫?」

香川さんは不安そうに俺を見る。

『言ひにくいなら無理しなくていいわよ?私達双子の姉妹つて事になつてるみたいだし、どうやらわたしはサクラつて名前みたいだし。シェルターはシンジと合流してから行きましょう?』

記憶を辿ると俺はこの世界では香川さんの双子の姉の香川サクラという名前らしい。

暫くすると、駅の出口からこの世界の主人公たる碇シンジが現れた。

しつかし浮かない顔してるなあ。そしてえらく中性的な顔だ。

シンジは駅前に出て誰かを待っている様子だ。

「行きましょ」

俺は香川さんの手を引きシンジの側に向かった。

「キミも誰かを待ってるの？」

「え？…はい。父親に呼ばれて……代わりに葛城さんって方が迎えに来てくれるらしいんですけど……」

はあ…。妙におどおどしてるなあ。初対面の人間に話しかけられてそんなに緊張するか？

「えつ、それ、わたし達も同じよ？こっちは父親じゃなくてネルフってところからだけど。ねえ、か……アリサ？」

やべえ、双子の設定なのにここで香川さんって呼んだらおかしいだろ…。それにめっちゃわざとらしいリアクションやし。

「う、うん。私たちと同じだね？あつ、わたし香川アリサって言つの。」

「で、わたしが双子の姉の香川サクラ。年は、お互い14よ。まつ、双子なんだから年が同じなのは当たり前よね。あ～つ、もしかして何で双子なのに似てないの？って思ってるでしょ？」

「え？いや、確かにそうだね」

「私たちは一卵性の双子なの。だから似てないの」

と、香川さんが答える。「へえ、そうなんだ。珍しいね。あつ、僕は、碇シンジって言います。年は一人と同じです。」

「ふうん、シンジって呼んでいい？ここで会ったのも何かの縁ね。仲良くしましょ？」

結構強引だけど、まあ、いいか。

「う、うん。よろしく香川サクラさん、アリサさん。」

シンジは軽くお辞儀をする。

「そんなに硬くならなくてもいいよ。わたしの事はサクラって呼んで」

「わたしもアリサでいいよ？」

「うん、サクラさん、リサさん」

“さん”要らねえの。‘‘さん’もいらないわよ
「う、うん。分かった。サクラ」

ドビードン ドカーン

突然、爆発音が響き渡った。

「あ、あれは……」

シンジは呆然とそれの方を見る。

「あれが、使徒……」

「うん、あれが、第3使徒サキエルよ」

サキエルは戦自の攻撃を全く無視し、まるで虫を払つかのように戦闘機を払い落としている。

俺たちが、その非現実的な光景に呆然としていると、何処からか車のドリフト音がしてきた。

振り向くと、猛烈なスピードで青いルノーがこちらに向かってきていた。

キキキイー

「ゴメン、お待たせ。3人とも直ぐに乗つて！」現れたのは、サングラスを掛けたグラマーな女性 葛城ミサトその人だ。

俺たちは言われるがままに青いルノーに乗り込んだ。

NERV本部発令所

「目標は依然として本部へ進行中。艦隊のミサイルも効果ありません！」「航空隊の戦力では足止め出来ません！」

オペレーター達の悲痛な報告が飛び交う。

「総力戦だ！厚木と入間も全て上げろつ……」

「出し惜しみは無しだ！何としても潰せ……」

次々に使徒サキエルに対し攻撃が加えられるが、まるで効いていない。攻撃を無視するかのように進行を続ける。

「直撃の筈だ……」

「戦車大隊は壊滅……。砲爆撃もまるで効果なしか……」

「……化け物め」

戦自の高官達は初めて見る敵に啞然としていた。

戦自の高官達の後方で二人の男が言葉を交わす。髭面にサングラス、そして顔の前で腕をくみ威圧感を出しているNERV総司令こと、碇ゲンドウと副司令の冬月コウゾウだ。

「15年ぶりだな」

「ああ、間違いない。使徒だ」

冬月が呟きゲンドウが答える。

「やはり、ATフィールドか？」

「ああ。使徒に対し通常兵器では役に立たんよ」

PiPiPi……。高官達の前にある赤電話が鳴りカードをスリットに通して電話に出る。

「……はつ、わかりました。予定通り発動致します」

ミサトの車の車内

ふと、俺が使徒の方を見ると戦自の攻撃機達が一目散に使徒から散つていった。間違いない。N2爆弾を使うつもりなのだろう。街とその街の住民を犠牲にして……。

「葛城さん？なんか戦自の飛行機一目散に逃げ出しましたけど？」
ミサトさんは慌てて双眼鏡で使徒の方を見る。

「…………まさかっ！ N2地雷を使うわけえ！？ 伏せて！－！」

俺は、咄嗟に香川さんの上に覆い被さった。数秒後、ものすごい衝撃波と爆風が俺達を襲つた。

再び、発令所

「目標は？」

「電波障害の為、しばらくお待ち下さい」
発令所のモニターは砂嵐状態になつていて

「あの爆発だ。ケリはついている」

高官の一人が自信たっぷりに言つ。しかしその自信は直ぐに打ち砕かれた。

「爆心地に高エネルギー反応！－！」

「なんだとお！？」

反論したのは勿論先ほどの高官である。

モニターに映し出されたのは、多少のダメージは受けながらも回復しつつある使徒の姿であった。

「我々の切り札が……」

「なんたることだ……。」

「街一つ犠牲にしたんだぞ……」

それぞれ呆然とする高官たち。

それに追い討ちを掛けるように一本の電話が入る。

「……はつ、いや、しかし……わかりました。碇君、本作戦の指揮権は君に移った。お手並みを拝見させてもらひつ」

「だが、君なら勝てるの」

「その為のNERVです」

ゲンドウは高富達の嫌みをものともせず、キッパリて答えた。

第壱話 第3新東京市へ（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。
今の所ここまでしか出来上がりていません。第弐話公開まで暫くお
待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9236o/>

明るい未来へ

2010年11月15日02時35分発行